

SRID NEWSLETTER

No.302 JANUARY 2001 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

クオ・バディス：新世紀の開発政策

一橋大学 浅沼 信爾

時間の流れは連続的で、新世紀といっても特別の意味があるわけではない。しかし、米国では新政権が誕生するわけだし、多少長期的に物事を展望する良い機会かもしれない。昨年の暮れワシントンで、世銀が実施中の IDA 13 (IDA 資金の新規出資) の交渉を始めるにあたって、過去の IDA の有効性を考察し、将来の IDA 政策を考えるワークショップがあり、これに参加する機会があった。それを契機に、開発政策の将来を私なりに考えてみた。もっとも、新世紀を展望出来るような想像力や知見は持ち合わせないので、もっと目先のことしか考えられない。確実なことは、過去半世紀の経験が示すとおり、開発政策も変化するということだけだろう。

第二次大戦後に国際的なアジェンダとして登場した国際開発は、輸入代替工業化(40年代半ば～)、輸出志向型工業化(60年代半ば～)、構造調整と貧困削減(80年代半ば～)と、20年周期で戦略・政策転換を経験してきた。20年周期にどのような意味があるかははっきりしない。新しい政策を10年続けてみて、環境変化あるいは効果に対する疑問が芽生え、反省をもとに新しい政策を考え、実験し、それが主流になるまでにあと10年くらい必要ということかもしれない。とすると、そろそろ開発政策の転換あるいは新たな展開が議論される時期ではなかろうか。

政策転換の方向性は、すでに昨年の世銀の貧困削減を主たるテーマにした世界開発報告書(WDR)を廻って捲起った議論から汲み取れる。世界的な貧困削減が、開発政策の究極目的であることに異論はない。しかしそれを達成するための戦略や政策手段は何かとなると、過去10年来開発援助の主流になってきたいわゆる人間開発、すなわち社会開発や直接的に貧困層に働きかけるプログラムやプロジェクトが必ずしも究極目標達成に成功を収めたわけではない。また同時に、貧困削減の手段としての経済成長が、ある程度おざなりにされてきたことは否めない。ちなみに、ここ数年の IDA 実績を見ると、貧困削減に密接に関連している農業や農村開発、あるいは中小企業育成などの生産能力増進のための融資は縮小傾向にある。そこで、経済成長を開発政策の前面に据えることをおいて他に、長期的な貧困削減目標を達成する効果的な政策手段はない、というのがこの議論の趣旨である。東アジア諸国の経験もそれを支持している。「経済成長のない貧困削減(政策)は、デンマーク王子のいないハムレット劇のようだ!」といったと伝えられるローレンス・サマーズ財務長官の言葉は、この主張を

よくあらわしている。

IDA13 ワークショップにおける私自身の主張も、この線に沿ったものであった。現在いわゆる世銀・IMF の主導する「貧困削減戦略ペーパー」(PRSP) が途上国の開発計画の中核的存在になりつつある。しかし、そこに盛り込まれた政策アジェンダが真に途上国政府自身によって形成された、自身のアジェンダになるためには、すなわちそれが IDA ドナー・サイドのアジェンダに止まらないためには、途上国のあらゆる経済階層を包括的に捉える経済成長のアジェンダを中心に据える必要がある。現在の貧困削減政策は、IDA ドナーの政策アジェンダでありえても、途上国政府自身のものにはなりえない。

新世紀に入って、世銀も、ADB も、日本政府も、ODA 政策の見直しを迫られそうだ。そして、その前にわれわれ国際開発に携わるものは、今一度見かけの「ポリティカル・コレクトネス」(時流に合った政治的立場)や「モラル・ハイ・グラウンド」(道徳的な見かけのよさ)を離れて、現実的な戦略・政策の問題として国際開発を議論すべきではなかろうか。

「海の帝国」に見る東南アジア世界

国際協力事業団無償資金協力部 佐々木 弘世

最近ある友人に進められ「海の帝国」という新書を読む機会を得た。過去2回にわたり10年間の間隔において通算7年程インドネシアに在勤していたこともあって東南アジア世界の生い立ちに漠然とした興味を持っていたが、同書を読みながらその奥深いまた不思議な魅力に満ちた世界に魅了された。

同書の著者はインドネシアを中心とする東南アジア研究者として優れた研究業績を持ち、現在京都大学東南アジア研究センターの教授の職にある白石 隆氏である。

著者の話は19世紀初頭、シンガポールの建設の立役者として名高い英国人ラッフルズが描いた「海洋新帝国」の構想から始まる。それは、ベンガル湾からマラッカ海峡、東インドの島々を経てオーストラリアに至る線を軸とする新しい地域秩序、すなわちイギリスが非公式に支配する海洋自由貿易帝国を建設するものだった。それまでの東南アジアは国境によって定義される近代的な国民国家ではなく、王が居住する土地、すなわち「勢力あるいは権威の中心」によって定義される国家によって構成される「曼荼羅」システムであった。こうした「曼荼羅」世界の上に19世紀、「リヴァイアサン」すなわち近代的な国民国家が、それまでの東インド会社を通じて行われたオランダの植民地政策を反面教師としたイギリスの「自由主義プロジェクト」によって移植されていくこととなった。かくして東アジアから東南アジアにかけて、海上交易を軸とするネットワーク「海の帝国」が誕生する。その後、イギリスが進めた「文明化プロジェクト」は、住民把握のための人口調査を通じて同地域に住む住民の間に「中国人」、「マレー人」、「インド人」といった「民族」を生み出し、その成功が、やがて植民地支配からの解放と独立を求める「アイデンティティの政治」を生み出すこととなる。19世紀の終わりから20世紀の初めの出来事である。話は進み、第二次世界大戦の終了後、イギリスに替わり同地域における国際共産主義の影響力を封じ込めることを目的として「自由アジアプロジェクト」がアメリカ・ワシントンにおいてディーン・アチソン、ジョージ・ケナン、ジョン・フォスター・ダレスといった人々によって生み出されて

いった。このアメリカが進めた「自由アジアプロジェクト」は二つのサブ・プロジェクトの実施により進められた。ひとつは「半主権プロジェクト」であり、もう一つは「ヘゲモニープロジェクト」であった。「半主権プロジェクト」とはアメリカの力を何らかの形で東・東南アジア諸国の国家機構にビルトインすることであり、ジョージ・ケナンが構想した「日本の頸動脈に置かれた（アメリカの）手」を意味する。一方「ヘゲモニープロジェクト」とは同地域に「豊かさの夢」、そしてそれを実現するための「経済成長への信仰」を具体的な形で仕掛けることであった。こうしたアメリカの描く東・東南アジア戦略の中で米・日・東南アジアという三角形の地域秩序が出来上がり、その中で日本の同地域に対する経済協力も位置付けられてきた著者は論を進めている。

東・東南アジアを地域として語ることは非常に難しい。そもそも言語の多様性などから、すべての国の政治や歴史を把握することは不可能に近いと言っても過言ではないだろう。また、仮に当該地域に安定した共通性が存在するのであれば、そうした共通性を手掛かりに東南アジア地域全体を眺めることも可能かもしれないが、その様な試みも極めて困難な試みであることは想像に難くない。そうした困難性の中で「海の帝国」のなかで示された、東南アジア地域を百年から二百年のタイムスパンで捉え、東南アジア世界をそこにおける地域秩序確立のための一連の構想と形成の経緯を軸として捉えようとした試みは斬新かつ壮大な試みであり、同地域と今後日本がどの様に付き合っていくのかを考えるうえで極めて多くの示唆を与えてくれる良書ではないだろうか。

また、この本だけでなく、国際日本文化研究センターの川勝平太教授による「文明の海洋史観」など最近の歴史研究において「海洋」の視点が重視されるようになってきているようであるが、遺物や資料の豊富な従来の「陸」から歴史・文化を眺める視点と併せ、「海」に目を向けることにより多くの実りを得ることができると教えてくれるお勧めの一冊である。

入会の挨拶

国際協力事業団 小森 剛

SRID と出会ったのは大学一年時の国際協力セミナーで、その一月から学生部の会員となり、大学三年時に学生部代表を経験させていただきました。そしてこの4月、国際協力事業団への入団をきっかけに入会をしました。

学生時代最後の一年間（昨年度）は大学で学んだ内容を深めるためフィリピン大学に在籍しました。フィリピンにおいてはJICAが行っている家族計画母子保健やエイズプロジェクト等を見学し、また多くのNGO活動にも触れることができました。フィリピンを留学先に選んだのは、学生部の代表を務めている時にスタディツアーで行っており親しみがあるということも理由の一つでした。

こう考えると私と学生部での活動は切っても切れない関係にありました。また、その活動はSRIDの関係者の多大な協力の下にあったことは言うまでもなく、今後は何らかの形で学生部をサポートしていくことができると考えています。また、SRIDの活動を通じて多くのことを学び、自分の経験も還元していきたいと思えます。

現在は経理部に所属しており、直接プロジェクトを担当したり、調査に行くということはしばらく無いのですが、援助をお金の流れという切り口から眺めることができ、

今まで全く持っていなかった視点であり勉強になっています。援助業務の効率化など質の向上が叫ばれる今日では、経理業務を遅延無く行い、事業担当者に的確なアドバイスやサポートを行うことも重要だと考えています。その意味においても、自分の背負っている責任や役割の大きさを実感しています。

21 世紀の前半部分は我々若手が国際協力を進めていくんだという意気込みで業務に励んでいきたいです。

お知らせ

1. 新年会の出欠の返事をまだ事務局にしていない会員の方は、
e-mail sridjimu@par.odn.ne.jp もしくは tel/fax 03-5226-0620
へご連絡ください。新年会の日時は下記の通りです。
日時 2001年1月19日（金）午後6時30分から午後9時
場所 如水会館

2. 会員住所録の改定の訂正
先日、配布いたしました会員住所録に訂正があります。(敬称略)

伊藤 拓治 株式会社ダイナアーツ・インターデベロップメント
小椋 紹也
和気 邦夫 UNFPA
菊地 邦夫 Masaoka & Associate, Inc. Senior Advisor